

「御用留」の性格と内容 (四)

——武州荏原郡上野毛村「御用留」の検討——

森 安 彦

目 次

はじめに —— 史料論の一視点 ——

一 「御用留」の機能と成立

二 上野毛村「田中家文書」と「御用留」

三 享保五年～寛政六年「御用留」の検討

四 寛政七年～文化四年「御用留」の検討

五 文化四年～文政四年「御用留」の検討

(以上一九号)

六 文政四年～文政一三年「御用留」の検討

(以上二二号)

七 文政一三年～天保一二年「御用留」の検討

(以上三二号)

八 天保一三年～嘉永四年「御用留」の検討

(一) 「御用留」の存在状況

(二) 相州海岸防備の夫役

「御用留」の性格と内容 (四) (森)

(三) 領主支配の動向

(1) 天保改革法令

(2) 天保一四年の日光社参

(3) 関東取締出役と組合村

地代官・村役人の動向

(1) 代官大場家の公私の二面性

(2) 猪方村名主父子の入牢一件

(3) 名主退役と引継文書

(4) 宇奈根村名主排斥騒動

(四) 江戸と世田谷領農村

(1) 江戸屋敷の下掃除

(2) 江戸屋敷への駈付人足

(以上本号、未完)

八 天保一三年～嘉永四年「御用留」の検討

(一) 「御用留」の存在状況

本章では、武州荏原郡上野毛村名主田中家文書の「御用留」のうち、天保一三年（一八四二）から嘉永四年（一八五二）までの一〇年間の「御用状留記」九冊と「諸事御用向留記」五冊の合計一〇冊を検討対象としたものである。

しかし、この内、天保一四年分の「御用状留記」は欠本している。

この一〇冊の「御用留」の表題年月、表題、収載年月、収録項目数等を一覧表にしたものが第1表である。これによって判明するように、「御用状留記」が天保一三年（一八四二）

第1表 天保13年～嘉永4年 武州荏原郡上野毛村「御用留」

番号	表題年月	表題	収載年月	収録項目	備考
1	天保13年正月	御用状留記	天保13年正月～同年12月	119	天保12年11月2項目含む
2	天保15年正月	御用状留記	天保15年正月～同年12月	83	天保14年12月2項目含む
3	弘化2年正月	御用状留記	弘化2年正月～同年12月	60	
4	弘化2年4月	諸事御用向留記五	弘化2年4月～嘉永7年12月	58	
5	弘化3年正月	御用状留記	弘化3年正月～同年12月	81	弘化2年12月1項目含む
6	弘化4年正月	御用状留記	弘化4年正月～同年12月	77	弘化3年12月2項目含む
7	弘化5年正月	御用状留記	弘化5年正月～同年12月	70	弘化4年12月1項目含む
8	嘉永2年正月	御用状留記	嘉永2年正月～同年12月	79	嘉永元年6月1項目含む
9	嘉永3年正月	御用状留記	嘉永3年正月～同年12月	86	
10	嘉永4年正月	御用状留記	嘉永4年正月～同年12月	131	

から嘉永四年（一八五二）までの一〇年間であるのに対して、「諸事御用向留記 五」は弘化二年（一八四五）四月から嘉永七年（一八五四）二月までの約九年分の内容が収録されており、両者の間に三年間の「ずれ」があるが、ここでは、収録の記載内容を検討の対象としたい。

さて、この期間の特徴としては、幕政最後の改革である天保改革の後半から、開国直前までであり、内外共に多難な危機をはらんで推移していることである。

彦根藩世田谷領にとって、この時期の歴史的事柄としては、領主として井伊直弼が登場してくることである。

嘉永三年（一八五〇）「御用状留記」の一月二七日の項に「殿様御儀閑日被為召御登場被遊候処、御老中様御列座^ニ而御名 掃部頭様と御改可被遊旨 上意之趣被仰達恐悦之御事^ニ候」とあり、將軍の命により直弼が井伊家代々の官職名である「掃部頭」を名乗ったことを記し、この趣を「諸御屋敷御家中衆井佐野・世田谷^五も相触候様可被致候」とあり、このことが「御用状留記」の記載となっているのである。

直弼は藩主に就任すると、翌一二月には、藩領内の「窮民」に対し、「御救米」と「御遺志金」の施行を実施したのである。⁽²⁾

以下収録の記載内容を中心に検討してみたい。

(二) 相州海岸防備の夫役

天保一三年（一八四二）から嘉永四年（一八五二）の「御用留」のうち、欠本している天保一四年（一八四三）分を除いたこの期間の夫役負担の動向を表示すると第2表のとおりである。

この期間の特徴として、表示の中にある「その他」の夫役負担が激増していることである。その内容は弘化四年（一八四七）から開始される相州海岸防備夫役である。

天保一四年（一八四三）大老を辞職した井伊直亮が相模国の海岸警備を命ぜられたのは弘化四年（一八四七）二月のことで、相州大矢部村（現在横須賀市内）に陣屋を設け、以来彦根藩は国防の第一線の任に就くこととなった。

嘉永三年（一八五〇）十一月兄のあとを襲名した直弼も引続いて相模表警備の責任者として、外国の事に専念することとなったのである。³⁾

それにより彦根藩世田谷領村々には新たに相州海岸警備御用人馬の徴発が課せられたのである。この期の「御用留」に

村「御用留」からみた夫役負担の動向

					幕府関係					合 計				
そ の 他					鷹場・玉川筋			用 水		回 数	人 足		馬	
回数	人数	全体	馬数	馬全体	回数	人数	全体	回数	人数		上野毛	全体	上野毛	全体
2	5		1		6	20	238	0	0	29	134	1130	8	47
0	0	0	0	0	2	6		1	1	30	105	641	10	116
0	0	0	0	0	4	9	144	1	1	21	51	628	2	
1	7	103	0	0	5	11		1	1	26	91	655	14	32
6	10	553	3	104	3	5	60	0	0	21	46	1346	8	156
3	9	10	1		5	11	144	0	0	24	88	682	6	
2	4		1	8	5	10	84	1	1	20	56	795	4	8
2	15	386			7	15	194	0	0	22	100	963	10	
3	7	50			5	14	118	0	0	32	132	1911	11	
19	57	1102	6	112	42	101	982	4	4	225	803	8751	73	359
2.0	6.3	122	0.6	12.4	4.6	11.2	109.1	0.4	0.4	25.0	89.2	972.3	8.1	39.8

であるが、上記の数字は全体数が記載された分のみであり、全体数の記載のなるものである。

は、これに関する記事が多数収録されているのである。以下その動向を窺ってみよう。

弘化四年「御用状留記」の二月二九日巳中刻（午前一〇時）過の記載によると、世田谷領代官所から世田谷領二〇か村で人足三〇〇人・馬一〇〇疋、そのうち上野毛村では人足七人・馬二疋差出しの指令が回達され、その文面には「右は先日申渡置候相州浦岸之御備御用人馬ニ有之間、今廿九日廻状着次第兼而覚悟之人馬即刻繰出し可申候、尤銘々鎌は持参致させ可申、其外わらじ・みの用意可致事、馬之儀は江戸家業ニ罷出居合不申候向は、今夕帰宅次第夜中ニ而も出し可申候」（八項）とある。ここで注目されるのは、これらの人馬の徴発は「兼而覚悟之人馬」とあり、相州浦賀防備のための人馬提供

第2表 天保13年～嘉永4年 上野毛

区分 内容 量 年	領主井伊家関係											
	人足			豪徳寺法事・参詣等					江戸屋敷			
	回数	人数	全体	回数	人数	全体	馬数	馬全体	回数	人数	全体	馬数
天保13年	7	54	501	8	42	285	7	47	6	13	106	
天保15年	6	23	381	9	38	190	10	116	12	37	70	
弘化2年	3	16	284	7	13	175	2		6	12	25	
弘化3年	0	0	0	10	36	429	10	32	9	36	226	4
弘化4年	1	3	84	6	21	514	4	52	5	7	135	1
弘化5年	0	0	0	12	53	335	4		4	15	193	1
嘉永2年	2	8	240	5	16	235	3		5	17	236	
嘉永3年	0	0	0	9	63	277	9		4	7	106	1
嘉永4年	3	18	437	11	50	682	6		10	43	624	5
合計	22	122	1927	77	332	3122	55	247	61	187	1721	12
1か年平均	2.4	13.5	214	8.5	36.8	346.8	6.1	24.7	6.8	20.7	191.2	1.3

（注）人数の全体・馬全体というのは彦根藩世田谷領20か村分全体という意味のもも少なくない。それ故実態としての全体数は、この数字を上まわ

はすでに事前に通告されていたものであることがわかる。またこの人足動員にあたっては、鎌の持参と草鞋と簀を用意することが命ぜられている。しかし、それから四時間後の「未中刻」（午後二時）には、「先刻相達候海岸御備人馬之儀御見合せニ相成候間、右人馬差出候ニ不及候ニ付此段申達候」（九項）と中止令が出されているのである。わずかに四時間で人足三〇〇人・馬一〇〇疋の大動員が取り止めになった理由については、とくに何も明示されていない。同日世田谷代官所から「相州御備場一件ニ付急御用筋有之間、明朝日五ツ時不遅候様村役人印形持参大場隼之助宅五相揃可申候」（一二項）と廻状が出された。

それからしばらくして、三月二三日付の触書で世田谷代官所から浦賀御用人足に関連して、村民の調査が実施された。その触書は次のとおりである（一五項）。

先達浦賀御用ニ付人馬共丈夫成もの撰立調置候処、彦根表より御尋ニ付其段申上候処、尚又柔弱之ものニ遣ひ道ニ寄御用弁も可致哉ニ付、何人程有之哉之旨猶又御尋ニ付、村々共残り人数書出し、甚内極老何人、十五才以上何人と申事心覚いたし、残男女之分は不残書印（以下略）

これによると、「浦賀御用」として人馬共に「丈夫成もの」を選別して調査してきたが、「彦根表」より、「柔弱之もの」も遣ひ道ニ寄御用弁も可致哉ニ付」として、身体の弱い者でも使い道によっては「御用」もできるとして、「柔弱之もの」の調査も命ぜられたので、「丈夫成もの」以外で村に残っている人数を、「極老何人」「十五才以上何人」、男は残らず書出しを要求されているのである。これはまさに総動員体制といえる。

それから四か月後の七月晦日に代官所から各名主宛に「来ル八月二日浦賀御用ニ付談し筋有之間、村々役人印形持参」（三五項）で上町の世田谷代官所への召集の回達が出された。八月四日には代官所から、「浦賀行人馬来ル八日出立之由七日夕揃之積リニ成候間、明五日一同寄合談し可申事ニ候」（三六項）という通達が名主宛に出された。

八月七日には世田谷領から一〇九人の動員で、そのうち五人が上野毛村へ割り当てられ、次の文面の代官所からの廻状が記されている（三七項）。

覚

高百九人之内

一五人

右は三崎表^正御道具類持夫^ニ付、今晚中件之通りさくら田御台所^正早々相揃候様出し可申候、（中略）一同^ミの・かさ持参させ可申候

しかし、これも「先刻相達し候八日・九日兩日出し分人馬相止可申候」（三七項）と中止になり、八月一五日に規模も半減して実施された（四一項）。

覚

一屯人

人足^メ五拾人 内^式拾九人三崎行
式拾屯人品川出

右之通三崎表^正立^出発^ニ付御用人馬^ニ候間、割附之通り今十五日夜中無間違御中屋敷宇津木音人御長屋^正可出候

一右之内三崎行之人足は先日之通り心得支度申付、無失念^ミの・笠・股引不残持参可申付、いづれもいきつえ持参可為致候（以下略）

これによると、上野毛村からは人足一人で井伊家世田谷領全体で五〇人となり、その内、二九人が相州の三崎行きであり、残りの二二人は品川出張と二分されている。一五日夜中に井伊家の江戸中屋敷宇津木音人長屋に集合し、三崎行の人足は全員、簑・笠・股引とともに、「息杖」を持参するように命ぜられている。「息杖」を持参するというこ

第3表 弘化4年2月 相模国海岸御備御用人馬等内訳

内訳 \ 村	上野毛村	18か村	合計
人足	19人	771人	790人
馬	2疋	102疋	104疋
柔弱之分	5人	225人	230人

但し「太子堂村人馬共無之分」として除く。

とは、土のう等の運搬を課せられるためであろうか。触書の末尾には「人足共撰人^ニ而丈夫成者出し可申候」とあることから重労働が予想される。

これらの簀・股引等は各人が持参したのではなく、「過日三崎御備場御用人足^五御貸渡し相成候みの・股引御村々限り御取集メ、来ル十八日早朝上町幸右衛門方^五御遣し可被成候」(四二項)とあり、世田谷領内の村名主たちが貸出していたものである。

弘化二年「諸事御用向留記 五」に記載されている弘化四年二月の項目には、「相模国海岸御備御用」として第3表の人馬の割当を命ぜられた。これによると、上野毛村では人足一九人・馬二疋、それに「柔弱之分」五人である。同村と太子堂村以外の世田谷領一八か村での負担は人足七十一人・馬一〇二疋と「柔弱之分」二二五人であり、出動のときは銘々が鎌・草鞋・雨具を用意することを命ぜられた(六項)。

また弘化四年三月三日には郷夫等の着類つき「綿服^ニ而不見苦敷着類帯相用、三尺上帯致させ可申事」とあり、またいつ「火急」の出動があるかもしれないので、「人馬家業たりとも遠方他行又は泊りかけ等決^ニ而不相成候」と規制された(六項)。

これらの人馬の夫役のみならず御用金の「御借上」も命ぜられた。その負担者と金額は第4表のとおりである。これによると名主・年寄四名で合計三〇〇両を出金している(六項)。

嘉永元年(一八四八)七月、世田谷領二〇か村惣代として世田谷村・弦巻村・用賀村・新町村・野良田村・上野毛村の六か村の名主七名から代官所に宛「相州海岸警備御用人

第4表 相州海岸防備費用借上金

村 名	身 分	名 前	金 額
瀬 田 村	主 主	長 崎 長 十 郎	100両
上 野 毛 村	名 主	七 左 衛 門	100両
(野 良 田 村	年 寄	權 藏	内 40両)
世 田 谷 村	名 主	新 右 衛 門	100両
合 計			300両

馬の賃錢増願書」が提出された(七項)。それによると、人足七九〇人・馬一〇二疋、同年八月中より同九月中まで、三崎と品川宿まで荷物持出し御用を命ぜられてゐるが、これは、江戸桜田の御上屋鋪詰その他の「常用人馬」と違い、「旅掛ヶ御用人足」で並賃錢では、とても勤めがたいので、村々の役人共が相談した結果、人足一人につき一二四文より三〇〇文・四〇〇文・六〇〇文まで、馬一疋につき三〇〇文より五〇〇文・八〇〇文迄の賃錢で勤務することとした。

これにより「三崎御備場御用人馬」の扶持米の支給は「御上屋鋪」その他諸向の「常御用人馬」扶持米の人足一人につき玄米三合より五合七勺五才・八合七勺五才・一升八合迄、馬一疋につき八合七勺五才より一升四合七勺五才・一升七合五勺宛迄、御用向に随ひ前々より支給されているが、「此度の相州海岸御備御用之儀は御定式之外全臨時御用之儀ニ付、幾重ニも御憐愍ヲ奉蒙御慈悲之御沙汰候様仕度一同御願奉申上候」と出願した(七項)。

これによると、扶持米額は規定していないが、相州海岸警備御用が臨時御用であることを強調して、扶持米額の増額を要求したものであることがわかる。

勿論三崎御用人足之分は「泊・昼食料共」御手当として一人につき一昼夜分二六〇文ずつ、外に小遣料として一人分一日一〇〇文ずつで五日掛りで五〇〇文を支給されるが、この三崎御用が宿泊をとまなう「旅掛ヶ御用人足」であることを強調して、賃錢・扶持米の増額要求をしたのである(七項)。

この世田谷領二〇か村の要求に對して、領主井伊家では、翌嘉永二年（一八四九）四月一三日に金五〇兩を下附した。村側では、この五〇兩を積金の元金として、これを貸付けて利息を増し、それをもって共同資金の一部に補充したのである（八項）。

以上により海岸防備という外患対策が、農民の負担の過重となり内憂を深刻化させるところにこの時期の矛盾が端的に示されているのである。

（三）領主支配の動向

（一）天保改革法令

幕府の三大改革の一つである天保一二年から同一四年までの、いわゆる天保改革が大名領である井伊家世田谷領にどのように浸透していったかは興味ある課題である。しかし、この「御用留」では肝心の天保一四年「御用留」が欠損しているで、改革の重要政策である「上知令」とそれに関するいっさいの法令等は不明である。

ここでは、とりあえず、天保一三年の「御用状留記」から改革法令や政策に関する事項を拾ってみよう。

前年の天保一二年一二月に出された「問屋仲間并組合杯と唱候儀不相成候」「何品^ニも素人直売買勝手可致次第候」という、いわゆる「株仲間解散令」が天保一三年の「御用状留記」の冒頭部分に掲載されている（四項目）。

同じく前年の一二月に出された「百姓商売家等株譲受渡し領内限りの触書」の三役人連印の請書が天保一三年正月二二日に世田谷領組合の大惣代深沢村名主有源次に提出された。

その内容は「屋敷改場内百姓商売家并常水茶や共、古来定株之分譲受渡儀酒造・醤油造り之類仕来之通り、其外は

葛西は葛西領、洲江は洲江領、都而其領内村々限り譲受渡取計、他領村々も譲受渡并町人共百姓人別ニ加り株式譲受候儀并、新規之儀は決而難相成、且無株ニ而商助成致居候分は村々も名前爲書出、無株之儀ニ付稼差留可申所、左候而、差向難決可致間、御宥免を以当丑巳まで五ヶ年之間其儘は差置候条、年限中追々帰農可仕、尤稼方之次第ニ寄年季中たりとも稼差留候儀は勿論急度御沙汰可有之旨村々江可被申渡候」とある（天保一三年「御用状留記」五項）。

その要点は、①百姓商家・常水茶屋共や古来定株の酒造・醬油造りの類は仕來の通りとする。②葛西は葛西領、洲江は洲江領とすべてその領内村々限り譲受渡の取計とすること。③他領村々より譲受渡しや町人共が百姓人別に加り株式譲受することは、許されない。④無株で商売している者は村々より名前を提出させ、特別の計らいで当丑（天保一二年）から巳（弘化二年）まで五か年間はそのまま許可するが、この年限中においおい帰農することとする。

天保一三年六月には「似せ金銀錢取締方触書」（同八七項）が、七月には「医書出版には草稿を医学館に差出すべき旨触書」（同八九項）が、八月には古金銀を貯え、吹直し金銀と交換しない者に対する取締法令（同八九項）がそれぞれ出されている。

同年九月には「公儀御触書写」として有名な「百姓之儀は龜服を着し髪ニ藥を以つかね候事古來之風儀ニ候処」という「百姓奢侈禁止などの触書」が記載されている（同九四項）。

この触書の要点は、①百姓が近年奢に長し身分不相応の品を着用し、無益の失費を重ねている。②百姓が余業に酒食商等をはじめ湯屋・髪結床ができ、若もの共がよからぬ道に走り柔弱かつ放埒になっている。③それ故、古代の風儀を忘れず物ごと質素にいたし、農業に励むことが肝要である。④先に株仲間組合一統停止し、御府内では自由に商売することを認めたが、自然村方にも商売が横行するようになったが、江戸の町々と村では異なり、百姓は専ら耕作に専念すべきで商売を始めてはならない。⑤近年男女の農業奉公人が少ないため、自然作奉公人の給金が高騰し、

とくに機織下女と称するものが過分の給金をとっているとのことである。このようなことが原因となって余業に走る者が多くなっている。元来百姓は町人とは異なり農業に精出し、所持の田畑から離れないようにすべきである。⑦勤当・久離・帳外等で倅や厄介人等を離村させ、村人口を減少させるようなことがあつてはならない。

以上七項目にわたつて、農民たちが商業に携わり、現金収入を重視し農業経営が衰退し村落人口が減少することを喰い止めようとしていることが判明する。天保改革の農民政策の基調が端的に示されているものといえよう。

天保一三年九月には「公儀御触書写」として「世上金銀貸借の利息下げの触書」（同一〇四項）がみられる。それによると、「是迄一割半」の利息を「以来金貳拾五兩^ニ付老歩之利足^ニ利下ヶ被^ニ仰出候」として、一割に引下げている。この利下げにより「以後棄捐等之沙汰は無之」として、金主らに安心して貸出させて世間の金融通の促進をねらっている。金銀出入の訴訟のあつかいについては、寛政九年（一七九七）の通達を守るよう命じている。寛政九年の「公儀御触書之写」には「元来人々相對之上之借貸^ニ候得は、取上ヶ裁許^ニも不及事^ニ候間、是迄之分裁許は不申付候、今出訴之分吟味之上夫々可申付候」（『世田谷史料叢書』第二卷七三頁、四二項）とある。

天保一三年一〇月には「在方不相応の家造を構え隠売女抱置禁止の触書」が出されている（同一一二項）。それによると「五街道宿々食売女之振合を仕成し、洗濯女抔と名付紛敷渡世致候段從來弊風^ニ而、一昧百姓共農業を怠風俗を損村々衰微離散之基」としている。また「今以不相当之家造模様をも不替類も此程方六ヶ月限急度相改万端質素^ニ致」とある。天保改革が一貫して風俗規制を強めていることがわかる。

同一三年一二月には「書物出版の内容規制の触書」が記載されている（同一一七項）。

それによると、①異教・妄説等の書、風俗や人々を批判した書、好色画本の禁止。②家筋先祖の事など新作の書物として世上流布することの停止。③権現様の名前を出すことはこれまで禁止してきたが、これからは、「急度致たる

諸書物之内押立候儀は御名書入不苦候」として、書物に「家康」の名前を出すことを容認した。歴代の將軍もこれに準ずるとしている。但し「輕やかな本等之類は只今迄之通り可相心得候」とある。④この他、「曆書・天文書・阿蘭陀書籍翻訳物は勿論、何之著述^三不限^而總^而書物板行致候節、本や共々町年寄館市右衛門方^五可申出候」として許可制をとっている。

老中から大目付へ出された、いわゆる「人返し」の法令が、天保一三年「御用状留記」に収録されている（二一六項）。長文の法令なので、その要旨を摘記すると次のとおりである。

①近年無宿・野非人が多くなり、御府内を徘徊し、中には不届の所業をするものも少なくない。②これにより此度、御府内に立廻る者は町奉行所で召捕り、糺明の上男女共それぞれ旧里へ帰郷申付けることとした。③帳外者や格別の罪人以外は村役人共や身寄の者へ引渡し、なるべくだけ改心帰農させ、旧里を離れないように取計ること。④しかしどうしても手に負えない者や度々出奔する者は、公儀においても、京・大坂その他奉行所等のある場所は勿論、代官所等においても、新しく寄場をつくり、そこに収容して「相応之手業」を致させ、又は荒地の開墾の労働力に使用するも勝手である。⑤それ故、私領においても同様に心得、万石以上の大名は領ごとに「牢鉢」の「囲ヲ補理」すること。万石以下の旗本知行所等は「寄場」へ引き渡してもよい。この上で、不断に教諭し、改心帰農を遂げれば囲外に居住を許し、厚き保護を加える。⑥もし、それでも逃亡し、盗みその他の悪事をする者は罪の輕重に随ひ、死刑その他の仕置を申付る。

以上の趣旨を万石以上以下、領分・知行・給知の面々ならびに寺社等へも洩れざるように相触らるべく候、とある。この「人返し令」によって、江戸周辺の村落に一時避難的に引越す借家人層が激増するのである。^④

天保一四年一二月には「金銀貸借并同出入につき触書」が書載されている（天保一五年正月「御用状留記」四項）。こ

れによると、これまでの「金銀出入」は、「今度為御救厚キ 思召を以」「裁許不申付」とあり、これまでの金銀貸借訴訟は幕府としては、取りあげないことを触れている。これは享保四年（二七一九）の「相对済法」と同性格のものである。すなわち窮乏し負債にあえぐ旗本・御家人の救済をねらったものである。このように天保改革政策の中には、享保・寛政の改革政策と同種のもものが登場しているのである。

(2) 天保一四年の日光社参

天保一四年（一八四三）四月、老中水野忠邦の主導下で実施された二代將軍徳川家慶の日光社参は、安永五年（二七七六）の一〇代將軍家治以来の約七〇年ぶりの將軍自身の登山であった。天保改革の推進中であった水野忠邦は、將軍権力の回復と発揚のために、この社参に全力をあげたのであった。

將軍家慶社参が公式に予告されたのは、一年以上前の天保一三年二月一七日であり、それから諸準備が開始された。⁽⁵⁾さて上野毛村の天保一三年正月「御用状留記」には次の三点の回状・触書が記載されている。

天保一三年一〇月二一日附で甲州道中、上高井戸宿問屋三左衛門・下高井戸宿年寄金右衛門よりの廻状として「来卯年（天保一四年）日光御用ニ付右御供被仰付候地頭領分之儀は代助郷被仰付、最寄ニ差村致、右差村帳取調可差出旨御沙汰有之候間、右ニ付御相談度儀御座候ニ付」（一〇五項）として、日光社参に供奉する旗本の知行所の村では「代助郷」を命ぜられることが判明する。これは知行所農民が人夫役として動員されるのである。

同年十一月九日勘定奉行梶野土佐守・同跡部能登守等からの「触書」が荏原郡北品川宿名主兵庫から「荏原郡御村々不洩様順達」されている。それによると、「来卯年日光山 御参詣之節御供其外共馬飼料之儀当六月中触置候餅・団子類之食物湯茶并沓・草鞋等同様百姓共心懸ケ成丈ケ沢山ニ貯置、御時節ニ至 御道筋宿村ニ持出商ひ可申候」（二・三項）とあり、社参の時にはその街道筋で、餅・団子等の食類や湯茶ならびに沓・草鞋等を販売するように奨励して

いる。

さらに、同年一二月には、前記勘定奉行より荏原郡村々に対して、「来卯年日光御参詣ニ付而は仕法相改、村々人馬疲勞不致、村入用も相減継送り方^ニも弁理宜様正人馬勤相止、道中筋荷物持馴候もの雇立惣金高之内、先前被下来候扶持米之代り十分一御入用被差加、殘金寄人馬可差出、村々高割を以出金之積、此度吟味之上受負申付候条」(一九項)とあり、「正人馬勤相止」、その代償として「村々高割を以出金之積」として、金銭の提供を求めている。實際の人は、その金銭で雇入れるということが明記されている。この「触書」も同年一二月二五日、北品川宿名主から「荏原郡惣御村々御名主衆中」宛に出されている。郡単位であることが注目される。

さて、翌一四年四月の日光社参の実施に当り、どのような動向がみられたかは、一四年の「御用留」が欠損しているので不明であるが、旧荏原郡代田村名主齋田家文書の中には、「天保一四^卯年三月日光御参詣御用御賄掛大澤宿詰日記」(齋田万蔵)があり、「御用下役」として動員された様子が判明する。⁽⁶⁾

なお、この「御用下役」に関連する論文としては、大館右喜「天保改革の一端——日光社参御用下役を中心に——」がある。⁽⁷⁾

(3) 関東取締出役と組合村

天保一三年(一八四二)から嘉永四年(一八五二)までの一〇年間の「御用留」には、関東取締出役と組合村に関する触書が二二項目にわたって収録されている。それらがどのような内容のものであるか、簡単に検討してみよう。

天保一三年正月「御用状留記」の九月二九日には世田谷村寄場役人・大惣代から組合村の岩戸・鎌田・上野毛・深沢・下沼部の五か村に宛て、「当月十六日も関東御取締太田源助様と四人亭人御預々相成、依之各様方へ御談申上度義有之候付、来十月朔日朝正五ツ時、世田谷上町万屋幸右衛門方へ御出勤可被下候」(九五項)とあり、世田谷村寄場

で囚人一名を預けさせられた記事である。

一〇月七日には、「世田谷村御預被仰付罷在候圈入番人足」として昼二人・夜二人の合計四人が十一月七日正五時詰として上野毛村に振り当てられている（二〇五項）。

同年十一月には、世田谷村寄場役人と惣代から廻状として、「去ル九月十二日ハ晦日迄関東御取締御出役様ハ囚人老入、十月廿九日ハ十一月十六日迄老入、兩度共圈入御預々被仰付罷在候雜用錢其外共、御一同御相談之上割合仕度候間、乍御苦勞様来ル廿七日朝正四時（午前二〇時）刻限無遲滞候様御自身世田谷村万ヤ幸右衛門方^ニ御出會、御相談之上御取計被下候様致度」（二二項）として、囚人預りの「諸雜用錢」等の負担の分担をきめる集會^ニもたれている。

天保一五年「御用状留記」の五月八日上仙川村名主嶋右衛門から世田谷・下北沢・上北沢の三か村宛に出された廻状に、「此度葛西領・淵江領村々惣代^ハ下肥し直段其外糶合等之義、都^ニ而先般御奉行所様御下知被仰渡候御趣意等閑之村方有之、夫々申立候處、今般肥類一条御取締之義、関東御取締御出役中山様御懸り^ニ而昨日私共内藤新宿御用先へ被召出御取締向被仰渡、追々寄場限大小惣代^ハ不殘被仰渡可有之候付」（二七項）とあり、下肥直段の統制等も関東取締出役の仕事の一つであつたことがわかる。

年代は少し離れるが、弘化三年「御用状留記」の十一月三日世田谷村寄場役人から深沢村・上野毛村の大惣代衆中宛に「関東御取締御出役駒崎静助様当村へ今夜御泊り被遊候、預置候囚人御調有之、右^ニ付御用筋有之間、只今御出勤被成候様被仰付候」（七二項）とある。

同年十一月二日には、上野毛村・深沢村の大惣代からの「廻状」が出され、「大組合諸入用向参会相延候處、明後廿四日朝五ツ半時（九時）用賀油屋弥八方へ御出席可被成候」（七四項）とあり、組合村の諸入用についての集會の開催が示達されている。

弘化四年「御用状留記」の中に「五月十日夕七半時（五時）過溝口村と中山誠一郎様御用状迄通継送り之分、即刻中目黒村迄継立」（二五項）とあるが、その「御用状」の内容は未詳である。

弘化五年「御用状留記」の九月九日寄場大惣代から「関八州御取締御用ニ付、来ル十六日世田谷岩蔵方^五参会之事」（五〇項）とあるが、「御用」の内容は不明である。

同年一二月二五日付で関東取締出役杉浦健蔵他四名の連名印で、「寄場惣代名前別紙雛形之通り相認可被差出」との指令が寄場・大惣代・小惣代宛に出され、世田谷村組合の寄場役人が書上げられている。それによると、武州荏原郡世田谷村外貳拾五ヶ村組合の寄場は世田谷村で、寄場役人は同村名主岩蔵・年寄幸右衛門、大惣代は深沢村名主有源次・上野毛村名主七左衛門、小惣代は下沼部村名主兵左衛門・岩戸村名主源蔵の六名であることが判明する（七〇項）。

嘉永二年「御用状留記」の正月二〇日に品川宿名主飯田庄太夫・問屋井沢源左衛門・年寄山本忠次郎の三名の連名で「関東御取締御出役渡辺園十郎様・太田源助様御儀、明廿一日当宿より御出役各様方^五御談筋有之候間、其御組合大御惣代御一同明日八ッ時（午後二時）迄^ニ当宿^五御出張有之候様」（八項）として大小惣代の招集を示達している。

この大小惣代を招集して相談すべき事柄は、正月二五日の世田谷組寄場大惣代の廻状として次のように記載されている（九項）。

以廻状申述候、然は此節近在へ悪もの立廻り所々^ニ而怪我いたし候もの有之^ニ付、関東御取締様方品川宿へ御出役之上惣代共被召呼取締向手配方被仰渡候間、此上悪もの立廻り候へ、組合村々小前一同申合取押候様御申付、且又他も追込来候共同様取計、風聞たりとも怪敷義有之候へ、早速惣代方まで御申聞可被成候、右は御取締太田源助殿・渡辺園十郎殿被仰渡候ニ付、此段御承知可被成候

これによると、江戸周辺へ「悪もの」が横行して、暴行等により「怪我いたし候もの有之」として、「取押」体制を指示したものであることがわかる。

さらに、正月三〇日には、関東取締出役太田源助から世田谷村組合寄場役人、世田谷村年寄岩蔵、上野毛村大惣代名主幾太郎を「内密申談御用向有之間、明朝日暮六ッ時（午後六時）過、瀬田村名主長十郎方迄窃ニ自身被罷出候様致度候」（二〇項）と呼び出しているが、その「内密申談御用向」とはどのような内容かは未詳である。

嘉永三年「御用状留記」の正月一五日には世田谷領寄場役人惣代名主新右衛門と右組合大惣代七左衛門・同有源次の三名が関東御取締御出役中様へ宛てた「内密申上書」が記載されている（一項）。

それによると、①去嘉永二年一二月二五、六日頃、下野毛村飛地へ小屋がけ致し、無宿共や近村の若者共が博奕を開催し、そこには、「悪者共立入」の風聞もあったので、その様子を報告し、召取方等についても上申するよう惣代共が評議をした。②しかし、年末の押しつまった時期で、惣代共も私用も含めて多忙で「寸暇」もなかった。そこで近村役人共が現地に赴き様子を見届けると、もはや「引払」ってそこにはいなかった。③惣代が評議し、村々役人共に申聞せるには、此度の儀は銘々村々にて取締の方法をみつけ、その上でも方法がない場合は、組合村々一同申立るようにしたい。④その方法が具体的にきまったら、関東取締出役様へ報告するということである。

同年正月一八日には寄場大惣代役人が組合村々へつぎの趣旨の廻状を順達している（一項）。

①当組合内で去暮中大形の諸勝負が催されたという風聞で、関東取締出役様よりの吟味の御沙汰があり、これは惣代・村役人共の等閑より発生したものである。②今般のことで村々限りで取締強化の方法をたて、その上でも手に負えないときは早速出訴することとする。③博奕賭の勝負が横行し、自然と無宿悪党者が村に立入り、欲情から喧嘩口論、果は火盗の難、押込・追落の類も広がり、組合騒動になることも計り難い。すでに熊谷宿一件村々大騒動となっ

たのもその一例である。④今般村々にて悪き風俗の者は厳しく規制し、小前末々迄この御趣意筋を急度申渡し、連印を取置くように。

ここに取りあげられている「熊ヶ谷宿一件村々大騒動致候」については、未詳であるが、博奕等が発端となり、村内治安が荒廢してゆくことを領主・村役人等が恐れている状況がわかる。

嘉永四年「御用状留記」の正月二〇日に「御取締出役様方々被仰渡之儀ニ付御談申度義有之」と寄場大惣代からの招集の廻状が記されている（四項）。

次で正月二三日には、世田谷領寄場大惣代からの廻状として、「当月廿日夜溝口村江拔刃を以押込、翌廿一日夜右村ニ徘徊候由ニ付、昨廿二日御取締山口頭之進様当寄場江御廻村被遊、隣組合江立入候も難計間、自然紛數駄之者見受候ハ、早々手配押搦候趣厳敷被仰渡候間、兼而申合候通り無油断心付可被成候」とあり、「盜賊人相書」が付されている（五項）。

同年二月二日には世田谷領寄場大小惣代よりの廻状が記載されている。すなわち、「御取締御出役様方々被仰渡候棒杭之義、先日参会之節各々様御写被成候通り、段々日延ニ不相成候様早々御認御建替可被成候」（一四項）とある。これは、文政改革取締の趣旨を「棒杭」に記入して村境等に建てることを命ぜられ、その実施を促したものである。

以上、天保一三年（一八四二）から嘉永四年（一八五二）まで一〇年間の「御用留」に記載された関東取締出役と組合村に関する記事であるが、その特徴として次の点をあげることができる。すなわち、①天保から弘化期にかけては寄場に預けられた「囚人」の番人足やその費用に関することが中心であり、②嘉永期に入ると、世田谷領村内でも、大がかりの賭場が開催されたり、「無宿・悪党」の横行乱暴が発生したりしていることである。

四 地代官・村役人の動向

(1) 代官大場家の公私の二面性

上野毛村の支配を担当している井伊家世田谷領代官大場家のこの期間の動向についてみることにしよう。

天保一五年「御用状留記」の正月二〇日の記事に、世田谷村年寄岩藏の「廻状」として、「御代官様御儀去九月中
御差控被 仰付罷在候所、昨一九日右一条之儀も御免ニ相成候ニ付、此段私も相達し候様被仰聞候ニ付右御達し申上
候」(二項)とあり、前年の天保一四年九月から四か月余り「差控」の処罰を受けていたことが判明する。どのよう
な理由でそうなったかについては、天保一四年の「御用留」が欠損しているため知ることができない。しかし、天保
一五年一二月一二日に再度「閉塞」の処罰を受けたことが、世田谷村岩藏の「廻文」でわかる。すなわち、「大場隼
之助様御儀昨十一日 御屋敷も閉足被仰付御儀被為入候ニ付、此段為念御知らせ奉申上候間、御一同左様御承引可被
成候」(七三項)とある。しかし、この「閉塞」は翌年の正月一日に解除されている。すなわち、「当村 御代官様御
儀去暮も閉足被仰付罷在候所、今朝日御免被 仰付候ニ付、此段御村々可相達旨被 仰聞候ニ付、此段御達し申上候、
且又明後三日例年之通り御年礼御出勤可被成旨相達し可申様是又被仰聞候ニ付、此段も御達し申上候」(八三項)とあ
り、正月三日の江戸屋敷の年礼も許されている。この代官が「閉塞」の処罰を受けたのは、「猪方村土手御普請仕立
方名主銀藏親子共私欲ニ抱り御吟味奉受候処、一言之申訳難相立」、名主銀藏は五月四日より一〇月一日までの六か
月の入牢、父親善次郎は、さらに下野国佐野領の牢獄送りとなり「永年」の処分を受け、代官はその監督責任を問わ
れたものである。

さて、当時の代官大場家は在地土豪として農業経営をはじめ金貸し等も行なっていたが、弘化二年の「御用状留記」の正月一七日の項に、大場家の貸付金をめぐって領内鎌田村百姓作十郎の返済につき次の記事がみられる。

①正月一七日鎌田村作十郎が上野毛村名主七左衛門のところへやってきて、「大場様借用金之儀」につき困惑し、このままでは、身上破産してしまおうので、何とか方策はないかと相談されたので、早速翌一八日上町の大場家へ罷出、歎願した。その結果、

②元金百兩のうち、当金五〇兩を返済し、残り五〇兩は当年より五兩ずつ無利足息一〇年賦の返済ではどうかと大場家が提案した。

③しかし、外にも借財があるので、残り五〇兩の返済は五年間猶余の後、六年目から一年に一〇兩ずつ、五年賦返済を作十郎側が嘆願し、その方向で解決の見通しを得ることができた。ただし、この件に関しては、大蔵村六右衛門も同道した。大場家は代官という公的立場と豪農という私的立場の両面から領民に対応していたのである。次に、この時期の村役人の動向を追ってみよう。

(2) 猪方村名主父子の入牢一件

天保一五年「御用状留記」の五月八日に瀬田村名主長崎長十郎から上野毛・下野毛・小山・野良田の四か村の名主宛に猪方村名主父子が召捕られた様子が次のように記されている。

今般川除御普請^ニ付猪方村名主銀蔵殿御召捕^ニ相成奉恐入候、然ル処又々去六日同人父善次郎殿是又御召捕相成重々奉恐入候事^ニ御座候、然ル処兩人共入牢被仰付候義^ニ候間、此段奉申上候(二六項)

とあり、玉川の「川除御普請」に関して逮捕されたことが判明する。後続文には具体的にその様子が書かれている。すなわち、「同月四日夕銀蔵義は本縄に懸り被召連候、翌五日出牢、尚又父善次郎義も六日夕腰縄^ニ而被召連是又直^ニ

入牢、兩人共御奉行安東七郎右衛門様御出役御召捕、相成候由何共嚴重之御沙汰奉忍入候」とある。そこで四か村の名主たちは、五月九日に猪方村名主宅へ見舞し、鯖の干物二五枚を持参し、その費用は一人当り錢六九文と記されている。

五月二日には、弦巻村安太郎・用賀村安之丞の兩名の「廻文」が記され、そこには、「今般猪方村同役父子共御吟味中、御座候処、御領分一同^ニ御慈悲願上遣し候^ニ可然哉と奉存候間（中略）、明日願書面直^ニ御屋敷^ニ差上致候間」（二九項）とあり、世田谷領分名主連印の「御慈悲願」の提出の準備を進めている。この天保一五年「御用状留記」の末尾に、この一件に関する記事がみられる。それによると、「猪方村土手御普請仕立方名主銀藏親子共私欲^{（五）}に拘り御吟味奉受候処、一言之申訳難相立、五月四日と十月朔日迄親善二郎・倅当役名主銀藏兩人共圍入被仰付罷在、銀藏義朔日出牢帰宅、善二郎義は佐野永牢入被仰付十一月朔日と佐野へ参り入牢罷在候」（八三項）とある。これによると、名主銀藏は五月四日より一〇月一日まで、約六か月入牢させられ、父親善次郎は、さらに、下野国佐野領の牢獄に「永牢入」となっている。これに関連して、代官大場・吉田の兩人は一二月一日より翌年一月一日まで「閉塞」となったのである。

この猪方村名主銀藏は赦免後の同年一二月一六日には「触次役」に任命されている（七五項）。

しかし、父親善次郎は、それから二年後も「永牢」のままであった。弘化三年「御用状留記」の一二月一九日には、弦巻村安太郎・用賀村安之丞の兩名で「廻文」を出し、善次郎の「御救願」の提出が準備される。すなわち、「今般良性院様御法事、付御領分一同大救被仰出候付、同役は相互^{（六）}候間、猪方村善次郎殿義御救奉願^{（七）}は如何哉と奉存候間（中略）、御集評之上願面相認候事故御印形奉願候」（七九項）とあり、「同役（名主役）は相互^{（八）}候間」という一句が目される。

(3) 名主退役と引継文書
弘化二年「諸事御用向留記
五」に記載されている嘉永
二年七月の記載に、小山村名
主源五郎が病気で名主役退役
に際して、「役向取計方諸帳
面類・御検地帳」等を同村の
年寄役兩人へ野良田村名主与
一右衛門・上野毛村名主七左
衛門を立会人として、引渡し
ている(二〇項)。

これによって、名主交代に
際しての引継文書の実態につ
いて知ることができる。

第5表はそれを表示したも
のである。これによると、二
種類二六七点であり、その
内訳として、土地関係が三種

第5表 嘉永2年 小山村名主退役による引継文書目録

書 類	数量	備 考
1. 田畑御検地本帳	4 冊	土地
2. 同写野帳新古共	8 冊	土地
3. 御物成御取附御下札 但嘉永元申年分共	94本	年貢
4. 田畑共御年貢取立勘定帳 但嘉永元申年分共外田畑御見捨帳	27冊	年貢
5. 諸向役入目割合帳 但嘉永申年分共	27冊	年貢
6. 御年貢諸雑用取立帳 右同断	27冊	年貢
7. 田畑御差出控 但右同断之内年暦不揃	33冊	年貢
8. 村方名寄反別帳	1 冊	土地・年貢
9. 宗門人別改五人組帳 内五人組2札 宗門2札 但嘉永二酉年迄之分	4 札	戸口
10. 宗門人別入抜帳	5 冊	戸口
11. 御用向留記帳 但嘉永二酉年七月迄之分	7 冊	支配
12. 御取締御改革一条諸帳面書付類	1 冊	支配
13. 六郷領用水5分水堀絵図面	3 枚	用水
14. 村鑑帳	1 冊	村況
15. 御触留諸帳面	1 包	支配
16. 人別一条書付類	6 枚	戸口
17. 御鷹餌鳥札御印鑑	2 枚	支配
18. 御用目付様方御印鑑	1 枚	支配
19. 御年貢上納御受取帳	4 冊	年貢
20. 名主役前江取置候諸証文類	10包	支配
21. 帳箱	1 ツ	文書保管箱

類一三点、年貢関係が七種類二二二点、戸口関係が三種類一五点、支配関係が六種類二二点、用水関係が一種類三点、村況関係が一種類一点であり、多い順からみると、年貢・支配・戸口・土地・用水・村況となる。「帳箱一ツ」は、これらの文書の保管箱であり、引継がれている点が注目される。

これらの文書引継が隣村名主の立合で確認されていることは、これらの文書が、村共同体の「公文書」であり、名主役という役職に附随するものであることを物語っている。近世における文書保存のあり方は今後の研究課題の一つである。

さて、同様な事例が下野毛村でもみられる。この「諸事御用向留記 五」の嘉永四年四月の項に下野毛村名主泰助四一歳が「近来病身相成農業渡世難出来」ので、兄弟統の縁で相州高座郡上鶴間村名主勘左衛門方へ身柄を移し病氣養生に専念したいと申出て、代官所の許可を得た（三四項）。名主泰助の跡役は年寄兩名で勤務することとなった。また名主役に関する文書保存については次のようにとりきめられた。

尚又泰助方ニ罷在候御検地帳、是外御用向取計罷在候諸帳面書付類之分、左之通取調候内御水帳之分御料所不残并御年貢勘定帳外当用差支ニ相成候諸帳面書付類、尚又宗門人別御改控帳宗旨共式冊、其外御用筋取計方差支ニ不相成候様夫々取調年寄兩人方預置候、尤右当用取扱之外当分入用も差而無之諸帳面向・御下札之分、外書物類は不残長持ニ入、封印附いたし賢十郎方大切ニ預置候也

右取調立会人年寄小吉・永次郎・泰助倅賢十郎、同人方分家親類之由平吉共、都合四人、外取調方見届として野良田村与一右衛門・上野毛村七左衛門兩人出席取計罷在候事

嘉永四年四月十八日行之もの也（三四項）

これによると、名主役執行に必要な書類は年寄役兩人へ預け、当分必要のない書類は長持に入れ、封印して、退役

名主泰助・悴賢十郎方へ預け大切に保管することになっている。この名主文書の取り扱いには村の年寄等四人と隣村名主二名が立会人として参加しているのである。

(4) 宇奈根村名主排斥騒動

宇奈根村では嘉永二年（一八四九）同村百姓新次郎が名主役に任命されると、年寄役勇次郎と悴鎌之助が中心となり、村人の大半を味方に引込み、「新次郎支配は難受抔、一統連印之訴訟致し」という村方騒動が発生した。⁽⁹⁾

名主新次郎が忌避された理由は、①新次郎は先年不届の「御仕置」を受けた嘉蔵の甥であり、嘉蔵は毎々新次郎宅へ立ち入り、万端新次郎の背後で指図している。②宗門改帳を新次郎のみ別帳に仕立て、気随我便者である等。しかしこれは文政期以来の村方騒動の延長線上の問題であり、元名主嘉蔵と村民との対立が基軸となっているのである。

嘉永三年「御用状留記」の四月一七日の項に、粕谷与一右衛門（野良田村名主）から田中七左衛門（上野毛村名主）・長崎長十郎様（瀬田村名主）宛の「書状」が収録されている。それによると、「宇奈根村一件ニ付明十八日五ッ半時印形持参、大蔵村名主六右衛門殿方^五出勤可致旨被仰聞候」（三二項）とあるが、集合の内容は不明である。

同年八月一五日には、岩戸村・猪方村両村名主から「宇奈根村一件差添之儀兼^而御談之通り御領分中^ニ而惣持^ニ相勤メ度段奉願上候処、御用懸りハヶ村^ニ而壹人ッ、出勤相勤候様被仰付候^ニ付、此段御達し申上候、尤日割之義は是迄之通り御心得三夜泊り^ニ御代合御勤メ可被成候」（四五項）とあり、これは宇奈根村で訴訟を起した者たちが逮捕され、その警備負担に関するものと思われる。

同年九月三日は「明四日宇奈根村御用懸り七人四ッ頃迄ニ喰違中屋敷へ相揃候様巻嶋南平より申越候間、共旨相心得村々通達可有之候、一、上野毛村七左衛門は父子とも出候様^ニと別段達来候事」（四八項）とある。

さらに十一月二七日には、江戸屋敷詰代官巻嶋南平から、宇奈根村御用掛り之者へとして、「宇奈根村御百姓四拾

六人惣代として林右衛門・惣八・徳次郎昨夜訴状を以罷出候^ニ付、慎中不埒之段理解申聞候處、我等方ハ罷歸り右訴状御奉行衆之留主宅^ニ指置、当人共儀は上野屋方^ニ止宿致し候、右^ニ付御用懸り七人之者兼々御内筋有之^ニ付、此書付着次第早速申通し御奉行衆御長屋^ニ可罷出候^ニ（八二項）という召集の「御用状」が出されている。

嘉永四年「御用状留記」の正月二六日の項には上野毛村名主七左衛門の江戸中屋敷へ出勤の指令と、その内容が「宇奈根村先達^ニ而村方預り^ニ申付置候御咎人四人一同御呼出し有之、右^ニ付御用向之趣^ニ候間、其旨心得（中略）着到可致候^ニ（六項）とある。

同年二月一五日の記事として、宇奈根村一件の処置が決まったという江戸詰代官吉田祐右衛門の手紙が収録されている。「昨日宇奈根村勇次郎・鐮之助・常三郎共相済申候、且昨年中夫々御咎被^ニ仰付候もの共名前別紙之通り^ニ而御座候哉（中略）、外^ニ御咎無之名前も為念認メ指越候間宜御調可被下候^ニ（二〇項）とある。それによると、宇奈根村六名中五五名（八三パーセント）が処罰され、一六名（一七パーセント）が処罰されなかったが、その中には、新次郎も入っている。処罰者の内訳をみると、年寄役勇次郎と倅鐮之助は「兩人共所持之田畑・家屋敷共闕所、彦根御領分五郡・佐野・世田谷御領分・江戸御構追払、源右衛門は「牢死も致候へハ廟所^ニ埋捨」、惣右衛門他三名は「居村払」、甚八他九名は「過料錢五貫文」、年寄常三郎は「役儀取上之上五貫文過料」、庄五郎他三一名は「過料錢三貫文」を課せられた。処罰者合計四九名で前記五五名とは相違している。また追放刑となつた勇次郎父子は、その執行の状況が次のように記されている。⁽¹⁰⁾

頭取入牢人勇次郎・鐮之助步行六ヶ敷、町駕^ニ乗せ喰違下永屋不浄門より品川大木戸^ニ而追払、御目付下役・奉行下役其外百人組附添行

この宇奈根村一件に「御用懸り」として勤めた上野毛・瀬田・大蔵・岩戸・世田谷・弦巻・猪方の七か村名主へは、

「金貳百疋宛」が与えられた。⁽¹⁾

嘉永四年「御用状留記」の九月三日の項には、宇奈根村年寄猪三郎・大蔵村名主六右衛門・岩戸村名主源蔵の連名の「廻文」として、「兼々御心配被成候宇奈根村一件諸雑用之儀只今以不行届候ニ付、私共正種々御掛合被成候間（中略）、右ニ付金子拾両出金可為致様対談仕候ニ付、何卒御慈悲を以御勘弁被成下候様偏奉願上候」（七五項）とある。宇奈根村では訴訟費用等の諸雑費を一〇兩の出金で勘弁してもらいたいと取扱ひ七か村名主へ歎願しているのである。

(四) 江戸と世田谷領農村

(1) 江戸屋敷と下掃除

江戸屋敷の下掃除（下肥）は周辺農村としての世田谷領村落の農業生産にとって重要な仕事であった。この期間の「御用留」には次の六項目の記事が収録されている。

天保一三年「御用状留記」の十一月四日には和泉村伝三右衛門から「下掃除之儀ニ付明後六日正四時（午前一〇時）世田谷幸右衛門殿方^{江戸}御苦勞御出会可被成候様、此段奉御頼上候」（二〇八項）という「廻文」が記載されているが、その内容は不明である。

天保一五年「御用状留記」の五月八日の項には上仙川村名主嶋右衛門から世田谷・下北沢・上北沢の三か村に次の「廻状」が出された（二七項）。

此度葛西領・淵江領村々惣代々下肥し直段其外糺合等之義、都而先般御奉行所様御下知被仰渡候御趣意等閑之村方有之、夫々申立候処、今般肥類一条御取締之義、関東御取締御出役中山様御懸り^{ニ而}昨日私共内藤新宿御用先へ被

召出御取締向被仰渡、追々寄限度大小惣代^正不殘被仰可有之候、其御組合村数取調早速可差出旨被仰付候間（以下略）

これは江戸の下肥し値段が高値になっているので、その引き下げを命じたものである。同年六月の世田ヶ谷領大蔵村の「下掃除議定連印帳」によると、「御府内下掃除之儀、近来追々高直^正相成、都而肥し物直段^正相嵩、田畑養肥し不行届致難儀候間、寛政度被 仰渡之姿立戻り候様仕度段、御触流し之儀、此度武蔵・下総兩國之内九ヶ領村々惣代々 御勘定奉行所井上備前守様^正奉願上候」とある。

このように「下肥し」値段が高騰したのは村方が競争で購入し、「糶取」ものがあるためであるとし、寛政度に立ち戻るよう、村方から勘定奉行所へ「御触流し」を出願しているのである。

同一五年七月一日の項には岩戸村源蔵・岡本村市郎右衛門の兩名の廻文として、「一昨廿九日上町^正而御一同御談之通り、昨卅日御中屋鋪吉田様罷出候処、能々御長屋御名前之内今一度和泉村下掃除連立掛合可申、此方^正而御長屋掛合之上^正而為汲取候儀無之趣答無之候^正而は、願人不及申此方迄無念候間、得と取調之上可申上旨被 仰渡候^正付、昨卅日帰村致候」（三五項）とあり、七月一〇日にも兩名の廻状が収録されている。

それによると、「兼而御一同御承知之御中屋下掃除一条、又候一昨八日吉田様^正罷出仰聞され^正付、夫々御長屋掛合致候所、承知之御名前拾軒之内七軒之儀は、先例之通り世田谷御領分^正而下掃除汲取候様^正罷成候得共、残る三軒、黒田平三様・佐藤勝五郎様・武村忠吉様、右御名前三軒之儀は千駄谷御屋敷之御畑拝借致、其場所^正自分下肥しは勿論油粕糠等迄調遣候儀^正付当分遺事不相成、万一不用^正相成候節は差遣へく、先々当分世田谷^正遺事不相成趣被申候」（三六項）とある。

簡単に要約すると、井伊家中屋敷の一〇軒のうち七軒分は従来通り世田谷領分の村々へ下掃除汲取を認めるが、残

りの三軒分は井伊家の千駄谷屋敷の畑の肥料とするので、世田谷領村々へは渡すことができないということである。「下肥し」高値で入手しがたくなる状況が判明するのである。

弘化二年「諸事御用向留記 五」に記載されている嘉永七年二月の井伊家世田谷領分惣代の弦巻村名主安太郎・用賀村同麻次郎・野良田村同与一右衛門・上野毛村同七左衛門・瀬田村同綱次郎の五名の連印によって代官所に提出した「願書」によると、次のことが記載されている（五四項）。

①今般八丁堀御屋鋪に新規の長屋ができたので、下掃除を頂戴したく出願した。②その運上金として、御勤番方様一人につき一か年銀一匁宛上納する。このほか、苳豆・干草共毎暮に上納する、その他二か条が列記されているが、この「願書」は「虚敷罷成候」として許可されなかった。この出願により「壹人ニ付付府料銀五匁ツ、出会之分壹人ニ付四百文ツ、相懸候分、全失墜ニ罷成次第也」としめくくられている。

弘化三年「御用状留記」の四月七日の項には、「来十日御屋敷下掃除相談、上町幸右衛門方へ出會、受負人三人と廻状相廻り候也、当年も弦巻村安太郎・岡本村市郎右衛門代り成、岩戸・弦巻・世田谷三人ニ而矢張受負申候也」（三〇項）とあり、下掃除受負人の代表は数か村ずつ順番で勤めていたことがわかる。

（2）江戸屋敷への駈付人足

天保一四年（一八四三）四月の江戸城附十里四方・大坂五里四方を幕府直轄領とする、いわゆる「上知令」に対して、井伊家では、その対象となる世田谷領の上知に反対する理由として、次の点をあげている。

世田谷領は幕府からの預り地であって、小荷駄馬二〇匹を常時用意して、江戸城とその近くに出火があった非常の場合、これら馬一〇疋に役人を差添えて、將軍の手道具・夜具その他の必要な品々を疎開させる役割のために与えられた所領であると主張した。¹³⁾

事実、江戸の大火や緊急事態の折には、世田谷農民は動員させられていたのである。

以下その事態を簡単にみることにしよう。

天保一五年「御用状留記」の五月一〇日の記事に代官所からの「廻状」として、「江戸出火、以の外なる大変に相聞恐入候事候、いまた駈と難分候へ共何さま人数大難に相考可出候」（二八項）とある。

弘化三年「御用状留記」の正月一五日には「唯今大火に付 御城割入可申候様子に付、早々人足惣出に桜田江可出候」として、上野毛村から「人足式人」を差出している（五項）。

この大火により井伊家江戸屋敷では八丁堀御蔵屋敷が類焼した。そのため正月一八日には上野毛村からは「人足式人」が「灰除人足」として動員され（八項）、ついで翌一九日にも五人の差出しを命ぜられたが、このとき世田谷領二〇か村全体で「灰除人足」として一〇三人が徴発されたのである（九項）。

さて、嘉永三年（一八五〇）二月五日には井伊家上屋敷が類焼するという大火に襲われる。その時の様子を同年の「御用状留記」によってみよう。二月六日の代官所よりの「廻状」によると、「二月五日朝四時（午前一〇時）頃々麴町四丁目出火いたし御上屋敷御類焼、同日四時半時（二一時）歟焼失奉恐入候義、右に付御用人足御領分中貳拾ヶ村一同、日々相動候当村分、先年明暦三酉年御類焼に当戊辰迄百九拾四年に成ル」（八項）とあり、一時間で全焼状態であったことがわかる。旧暦二月五日は春の突風が見舞う季節であり、火事が多発する時期であった。井伊家上屋敷が類焼したのは明暦三年（一六五七）の「明暦の大火」（振袖火事）以来一九四年ぶりであると記されている。この時、世田谷領からは三〇四人が動員され、上野毛村からは一人が出たが、この内の一人は世話人である（八項）。さらに「跡火取鎮灰除其外御用人足」として、七日より一二日まで六日分で名主二〇名、人足三〇四人ずつが出動し、人足合計一、八二四人となっている（八項）。さらに「類焼跡取片付人足」の動員は二月末日まで続行しているのであ

る（九項）。

また「御類焼」付御米多分御入用」として、「白米」五〇俵を納入している。これは年貢先納という形式をとっている。上野毛村は六俵を上納している（二〇項）。

上屋敷の類焼により、「諸家中」の人々は中屋敷へ移転したのであった（四七項）。
こうして、江戸周辺農村としての世田谷領村落の農民たちは、江戸の火急事に対応するよう組織されていたのである。

このほか、江戸屋敷の「奉公人」の供給問題や井伊直弼の領主としての政策等検討すべき課題も多いが、今回は省略することとする。

注

- (1) この一〇冊の「御用留」は『世田谷区史料叢書』第六巻（東京都世田谷区教育委員会、一九九一年三月発行）に収録した。小稿は、その解説論文を骨子として増補改稿したものである。本叢書の編集を担当された世田谷区立郷土資料館、とくに区専門委員池上博之氏には種々お世話になった。記して感謝するものである。
- (2) 拙稿「江戸周辺における『世直し状況』と農民支配政策——彦根藩世田谷領を中心に——」（『近世史叢』第二号所収、近世村落史研究会、一九七七年）
- (3) 『彦根市史』中冊、六九六〜七〇〇頁（彦根市役所、一九六二年）
- (4) 拙著『幕藩制国家の基礎構造』五三三頁（吉川弘文館、一九八一年）
- (5) 『栃木県史』通史編5・近世二、四二二〜四二三頁（栃木県、一九八四年）
- (6) 東京都世田谷区代田、斎田平太郎氏所蔵、未刊史料
- (7) 『所沢市史研究』第四号所収（所沢市、一九七九年）
- (8) 柳田和久「大場家の経営」（『せたがやの歴史』一四五頁〜一六二頁、世田谷区、一九七六年）
- (9) 『世田谷区史料』第六集一三二〜一三七頁（世田谷区、一九七五年）
- (10) 注（9）一三六頁

(11) 注(9) 一三六頁

(12) 『世田谷区史料』第三集三七八頁、三八二頁(世田谷区、一九六〇年)

(13) 『新修世田谷区史』上巻一〇七二頁(世田谷区、一九六二年)

